

働いて
20年

佐藤 博行さん

佐藤さんは、電子部品の会社を退職した後、縁あって現在の水産加工会社へ入社し、20年が経過しました。最初の仕事はメカブのボイル作業でした。以来、梱包や出荷業務など幅広い作業を経験し、仲間と共に現場を支えてきました。

「一番嬉しかったのは、就職できたことです。子どもが小さい頃で、忙しくても働ける喜びが大きかったですね」と振り返ります。震災では工場が被災しましたが、社長の迅速な判断で青森の工場を借り、1か月足らずで生産を再開。「お客さんを逃さずに済んだのは、あの行動力のおかげ」と語ります。

また、地域では少年野球の監督や野球協会副会長として長年子どもたちを指導。「子どもたちが地元の中学・高校で野球を続け、甲子園を目指す姿を見るのが夢です」と、スポーツを通じた地域のつながりを大切にしています。

今後の町については「若い人が減っているので、企業や地域がもっと魅力を発信してほしい」と期待を寄せます。SNSを活用した情報発信や、スポーツ・文化活動を通じたにぎわいづくりが、町の未来につながると話してくださいました。

生まれて
20年

西城 美空さん

平成17年、南三陸町が誕生したその年に生まれ、町の歴史と同じ時を歩んできた西城さん。

震災が起きたのは、まだ幼稚園の年中の頃。「小学校に入学する前の1年間は、町も私たちの生活も大きく変わりました。中学2年の後半からは新型コロナウイルスの影響で、修学旅行が中止になるなど、思い描いていた学生生活とは大きく異なった日々が続きました。それでも、クラスの仲間と力を合わせ、運動会や文化祭など、一つひとつの学校行事に取り組んできたことが思い出として残っています」とこれまでを振り返ります。

現在は、気仙沼市内の中学校で学校事務員として勤務しており、「転勤で南三陸町を離れる可能性はありますが、将来的には再び南三陸町で暮らしたいと考えています。町の魅力は何といっても海の美しさ。夏には花火を間近で見られるため、夏祭りも大好きです」と話してくれました。

「これからの町には、さらなる発展を期待しています。家族や愛猫を大切にしながら、危険物取扱者や図書館司書などの資格取得にも挑戦していきたいです。地元の若い世代が減っている現状は少し寂しいですが、いつか戻ってくる仲間と再び町を盛り上げられたらと思います。南三陸町と同じ20年を生きてきた者として、この町の未来に少しでも力を添えられるよう、これからも歩んでいきます」と力強く語ってくれました。

町の保育士として採用されてから20年を迎えた佐藤さん。最初の勤務地は名足保育園でした。「山や海へ出かけるなど、自然の中で子どもたちと季節を感じながら過ごした日々は、今でも大切な思い出です」と語ります。震災のときは妊娠中ということもあり、不安

も大きかったとのことでしたが、「園児たちと手を取り合って避難し、命の大切さを実感しました」と振り返ります。コロナ禍では、行事の中止や消毒の徹底など難しい判断が続きましたが、仲間と支え合いながら保育を続けました。「仕事をするうえで心がけているのは、子どもたちと一緒に楽しむこと。卒園した子が社会人になり、"先生、覚えてる?"と声をかけてくれたときは、心から嬉しかったです」と語ります。今後の町については、「どの世代も安心して暮らせる町であってほしいと願っています。プールやカラオケ、ボウリングなど、気軽に楽しめる娯楽施設が増えたら嬉しいです」と期待を寄せ、「若い世代へは"未来は今!"という言葉を送ります。今の自分の選択が未来を作ることを忘れないで、自分を信じて頑張ってくださいね!」とエールをいただきました。

畠山さんは、幼稚園の年中時に震災を経験し、中学生の時にはコロナ禍に直面しました。人生の節目で二度の大きな出来事に向き合ったことで「大変だったが、その分大きく成長できた」と振り返ります。

小学校では地元のお祭りを盛り上げ、中学では剣道部に打ち込みました。高校時代にはサンオーレそではまで海水浴場のアルバイトを通じてまちづくりに関心を持ち、現在の観光協会での仕事につながったとのこと。

「南三陸町の一番の魅力は"人の温かさ"です」と語る畠山さん。「震災直後、商店街で多くの皆さんに支えられた経験から、その優しさを実感しました。現在は観光協会の一員として、訪れる人々に震災の教訓を正しく伝え、防災意識を広める活動にも力を入れています」と語ります。

今後については、「町の人の優しさを次の世代に受け継ぎ、豊かな自然や特産物とともに未来へつなげたい」と話します。また、「夏祭りの実行委員として地域行事にも積極的にに関わり、これからも南三陸町を盛り上げていきたいと考えています」と抱負をいただきました。

働いて
20年

佐藤 道子さん

生まれて
20年

畠山 興斗さん

結婚
20年

三浦 博樹さん・百恵さん

■ あっという間の20年

結婚20年を迎えたご夫婦に気持ちを伺うと、開口一番返ってきたのは「もうそんなに経ったのか、あっという間でしたね」という言葉でした。

「結婚して間もなく長男が生まれて、気づけば子育て中心の毎日。気がついたら20年でしたね」（妻）
「ほんとに。あっという間で、振り返ると子どものことばかりだなんて思います」（夫）

■ 家族をつないだ剣道

思い出に残っていることを尋ねると、自然と話題は剣道へ。
「夫が剣道をしていたので、子どもたちも小学校から始めたんです。スポ少に入って、大会で町内外に遠征したことが本当に思い出深いですね」（妻）
「家族みんなで一緒に喜んだり泣いたり。試合のたびにドラマがあって、あれが一番印象に残ってますね」（夫）

長男は高校、大学と剣道を続け、娘も剣道を始め、様々な大会に挑みました。家族みんなで剣道を追いかけた時間は、夫婦にとってもかけがえのないものになりました。

■ 震災・コロナを乗り越えて

20年間の中では、震災やコロナといった大きな出来事もありました。「幸い命や家は守られましたが、だからこそ防災意識は強くなりましたね」（妻）
「コロナのときは遠征に行けなかったり、娘が東京の大会に出られなかったり。残念なこともありましたが」（夫）

■ けれども、そこでも夫婦は前向き。

「剣道に行けない分、家でバーベキューをしたり、家で楽しむ時間が増えましたね」（妻）

■ 夫婦円満の秘訣

長い結婚生活を支える秘訣を尋ねると、
「大きな喧嘩をしなかったことかな」（夫）
「ユーモアがあるから、本気で怒っても笑っちゃうんです」（妻）
「お互い尊重できる仲です」（夫）

さらに最近では、夜に二人でウォーキングを続けているそうです。「私の健康のために始めたのに、夫の方が痩せて調子が良くなっちゃって（笑）」（妻）
「いやほんとに。防犯のためについて行っただけなのに、自分が一番得してます」（夫）

妻が毎日欠かさず作る手作り弁当も、夫にとって大きな支え。「疲れていても必ず作ってくれて、本当にありがたいです」（夫）

■ 子どもたちへの願い

最後に、お子さんへの願いを伺いました。
「立派にならなくてもいい。正しく、周りに迷惑をかけないで生きてほしいですね。剣道を通して学んだことを活かしてもらえればうれしいですね」（夫）
「人とのつながりを大切にしてほしいですね。剣道を通じてたくさんの方と出会えたので、それが一番の財産です」（妻）

20年を振り返り、「結婚当初からほとんど変わっていない」と笑うお二人。子どもたちの成長を支え、夫婦で歩んできた日々は、これからの地域とのつながりへと続いていきます。

結婚
20年

長嶋 涼太さん・玲子さん

■ お菓子作りでつないだ絆と笑顔

南三陸町で長年にわたり、お菓子づくりを続けてきた長嶋夫婦。何もないところからのスタート。子育てと仕事の両立、そして震災という試練もありながら、お互いを支え合って歩んできた日々。その掛け合いからは、笑顔と絆、そして地域への深い感謝がにじみ出ていました。

■ はじまりは「移動販売」

― まずは、これまでの歩みを振り返っていただけますか？
夫：「もう20年、あっという間でしたね。"何かやろう"って始めたのが最初で。資金も設備もなかったけど、"お菓子を食べていこう"とだけ決めて。軽ワゴンにオープン積んで、移動販売から始めました。」
妻：「当時はまだ子どもも小さくて、仕事と育児で大変でした。でも、お客さんに"また買いに来たよ" "これ美味しかった"って言われるのが本当に嬉しくて。それが原動力になっていました。」

■ 仮設商店街での出会いと学び

― 転機となった出来事がありましたか？
夫：「震災後、仮設商店街でお店を持てたことですね。初めての"固定店舗"で、焼きたてをその場で提供できるようになった。お客さんの顔を見ながら仕事できるのが、何より嬉しかったです。」
妻：「店舗ってやっぱり安心感があるんですよね。私たちもリズムができたし、常連さんとの会話も楽しみでした。夫はどんどん新しいお菓子を考えてくるんだけど、私はすぐ"それはやめとこ"って止めちゃう（笑）。でも、その試行錯誤があって、今の看板商品も生まれたんです。」

■ 子どもたちへの願い

― お子さんも大きくなられたと伺いました。
妻：「上の子がもう大学生で。ここまで育てられたのは本当にありがたいこと。子どもたちが寝てから仕込みをしたり、早朝に仕上げたり。走り続けた20年でしたね。」
夫：「子どもたちには、好きなことを見つけて、自分の人生を楽しく歩んでほしいですね。仕事が何であっても、自分で選んで、自分の家族をつくっていったら、それだけで十分です。」
妻：「私たちが築いたこの家族が、子どもたちの安心できる"拠点"になってくれたら嬉しいです。振り返る暇もないくらい、元気に、楽しく生きてくれたらいいと思います。」

■ 地域とともに、これからも

夫：「ここまで続けてこれたのは、本当に地域の皆さんのおかげです。お菓子を通して、少しでも恩返ししていきたいです。」
妻：「夫はまだまだ新作アイデアが止まらないようなので（笑）、これからも二人で、楽しみながら頑張っていきます!」

取材中、笑い声が絶えなかったご夫婦のやり取り。そこには、年月とともに重ねた者にしか出せない信頼とぬくもりがありました。